

# 日本語の不確定代名詞の意味解釈について

## On the Interpretation of Indeterminate Pronouns in Japanese

吉田 智行 YOSHIDA, Tomoyuki

● 国際基督教大学  
International Christian University

 **Keywords** 不確定代名詞, 非選択的束縛, WH島の効果, ミニマリティ効果, プロソディ  
indeterminate pronoun, unselective binding, WH-island effect, minimality effect, prosody

### ABSTRACT

本稿では、日本語の「誰」や「何」などの不確定代名詞の意味解釈にかかる制約について考察する。一般的に、不確定代名詞の意味はそれと結びつく要素によって決定されると考えられている。たとえば、「誰が来ましたか?」のように不確定代名詞が「か」のような疑問の助詞と結びつけばWH疑問文の意味になり、「誰が来てもいいですよ。」のように「ても」のような譲歩の意味を表す要素と結びつけばWH疑問文とは異なる意味解釈を受けるようになる。これまで、埋め込み文に置かれた不確定代名詞の意味解釈について真っ向から対立する二つの観察が提示されているが、本稿では本質的な問題点を明確にし、ミニマリティ効果からの適切な分析を提案する。

This paper considers some constraints on the interpretation of indeterminate pronouns such as “dare” and “nani” in Japanese. The general understanding is that the interpretation of these pronouns is determined by the element that is associated with them. For instance, “dare” is interpreted as a wh-element if it is associated with the question particle “ka” as in “dare-ga kimasita-ka?” It will not be interpreted as a wh-element if it is associated with a concessive element “temo” as in “dare-ga ki-temo ii-desu-yo.” In the past, there have been two opposing observations presented on the interpretation of the indeterminate pronoun in embedded clauses. This paper will clarify some fundamental issues and present an analysis based on the notion of minimality.

## 1. イントロダクション

日本語の疑問詞疑問文（WH疑問文）は、「誰」「何」「いつ」「どこ」「なぜ」「どの」などの不確定代名詞と疑問の助詞が結びつくことによって構成される。<sup>1</sup> したがって、以下の（1b）と（2b）の例文は結びつくべき助詞がないのでWH疑問文にはならない。<sup>2</sup>（ $\neg$ は叙述文のイントネーションを示す。）

- (1) a.                ジョンは 何 を買ったの？  
      b. \*             ジョンは 何 を買った。  $\neg$
- (2) a.                ジョンは [メリーが いつ 来たと] 思っていますか？  
      b. \*             ジョンは [メリーが いつ 来たと] 思っています。  $\neg$

本稿では、これらの不確定代名詞の意味解釈のメカニズムについて考察する。不確定代名詞は（1a）や（2a）のように常に疑問の助詞と結びつかなければならないというわけではない。「ても」や「も」と不確定代名詞が結びつけば、以下の例文のようにWHとは違った意味解釈を受けることになる。

- (3) a.                ジョンは 誰 が来ても いつも 笑顔で接していた。  
      b.                どの料理を 食べた 人も 美味しいと言ってくれた。

このように、不確定代名詞は単体では意味が確定されず、何か別の要素に認可されて初めて意味解釈が可能になる要素である。本稿ではその統語的条件とイントネーションやストレスなどのプロソディとの相互作用に注目する。以前の日本語のWH疑問文の統語分析にはプロソディの視点からの考察がほとんどなされていなかったが、Ishihara (2002), Deguchi & Kitagawa (2002), Kitagawa (2006) などの一連の研究によって、WH疑問文の統語論とプロソディの関係についての理解が深まってき

ている。そこで、本稿の目的はDeguchi & Kitagawa (2002) の論点の一つである日本語のWH島の効果（WH-Island Effect）の現象を取り上げ、新しい分析を加えることである。結論としては、不確定代名詞に適切な意味解釈を与えるには、プロソディの要因も重要であるが、それ以前に統語論的な非選択的束縛（unselective binding = UBing）に関する条件を満たさなければならないことを示す。

## 2. 日本語のWH島の効果をめぐる論争

まず、WH島の効果とは、埋め込まれたWH疑問文の中からWHを外に移動することができないというものであり、以下の（4b）のような非文法性を示すものである。

- (4) a.                John asked [where Mary bought what].  
      b. \*             What<sub>i</sub> did John ask [where Mary bought t<sub>i</sub> ]?

少し話がそれるがここで指摘しておく、英語では*whether*とWHの相性が悪く、同一節内に両者が共起することが難しい。したがって*where*が埋め込み文の先頭にある（4a）は文法的であるが、*whether*を使った（5a）は非文法的である。このポイントについては日本語との比較において後でもう一度取り上げる。（5b）のデータについては（4b）と同じポイントを示しており、やはり埋め込まれた疑問文の中から*what*を文頭に移動することはできない。<sup>3</sup>

- (5) a. \*             John asked whether Mary bought what.  
      b. \*             What did John ask whether Mary bought?

それでは日本語の場合はどうであろうか。日本語では一般的に不確定代名詞を移動しないので、これが可能なので、これまでの議論では、論理形

式 (Logical Form = LF) における移動に WH 島の効果が認められるかどうかが焦点となっていた。そしてこの点に関しては、日本語では WH 島の効果がみられないとする立場とみられるとする立場の両方が混在してきた。前者は Lasnik & Saito (1984) や Takahashi (1993) に代表される。実際に使われた例文をみてみよう。

Takahashi (1993: 657)

- (6) ジョンは [メリーが何を食べたか] 知りたがっているの？
- (i) Does John wonder what Mary ate?
  - (ii) What is the thing x such that John wonders if Mary ate x?

Takahashi は (6) の WH 疑問文には、英語訳 (i) と (ii) で示されるように、二つの解釈の可能性があると観察している。(6) の (ii) の解釈が可能であるのなら、埋め込まれた疑問文の外の「の」と「何」が結びつくことが可能であるということになり、日本語には LF の WH 島の効果は存在しないと主張することになる。一方、後者の立場は Nishigauchi (1990) に代表され、(7) のような例文は「誰」と「何」が埋め込み文の「か」と結びつく Yes/No 疑問文の解釈のみが可能であり、主節の WH 疑問文としての解釈 (7ii) と (7iii) は不可能であると観察している。

Nishigauchi (1990:10)

- (7) ジョンは [誰が何を食べたか] 覚えていいますか？
- (i) Does John remember who ate what?
  - (ii) \* Who is the person x such that John remembers what x ate?
  - (iii) \* What is the thing x such that John remembers who ate x?

Nishigauchi の観察が正しければ日本語にも LF

においては WH 島の効果がみられることになる。それぞれの立場から提示された例文の類似性から、この対立する二つの立場の両方が正しいと結論づけることはできない。どちらの立場も、これらの疑問文が Yes / No 疑問文として解釈できるという点においては同じであるから、注目すべきはこれらの疑問文が WH 疑問文として理解することが可能なかどうかである。「の」にしても「か」にしても、以下のように WH 疑問文にも Yes / No 疑問文にも使われる。

- (8) a. ジョンが来たの？  
b. ジョンが来ましたか？
- (9) a. 誰が来たの？  
b. 誰が来ましたか？

したがって、(6) と (7) の例文が WH 疑問文の解釈を受けるのか Yes / No 疑問文の解釈を受けるのかは、不確定代名詞と結びつく疑問の助詞が主節にあるのか埋め込み文にあるのかによって決定されることになる。実際のところ、この判断は多くの母語話者にとって難しいことも多く、イントネーションやストレスなどが判断を左右する。そこで、WH 疑問文の解釈が可能かどうかを明確にするために、別の文末表現を使って調べてみることにしよう。以下の (10) と (11) の例文が示すように、「のかい」は Yes / No 疑問文にしか使うことがでず、「んだい」は WH 疑問文にしか使うことができない。<sup>4</sup>

- (10) a. ジョンが来たのかい？  
b. \* ジョンが来たんだい？
- (11) a. \* 誰が来たのかい？  
b. 誰が来たんだい？

Yoshida (1999) は、これらの文末表現を使うと、不確定代名詞の解釈に関する文法性の判断が簡単になることを示した。以下の例文は「何」が埋め込み文の疑問助詞の「か」と結びつくということ

を示していることになる。

- (13) a. ジョンは [メリーが 何を 買ったか] 知っているのかい？  
b. \* ジョンは [メリーが 何を 買ったか] 知っているんだい？

すなわち、(12a) は「何」が埋め込み文内で「か」と結びつき、全体が Yes/No 疑問文の解釈を受けるので文法的であり、(12b) は「何」がすでに「か」と結びついてしまっているため、「んだい」が「何」と結びつくことができず、文全体を WH 疑問文として解釈できないので非文法的になると説明できる。したがって、Yoshida の「のかい」と「んだい」を使ったテストの結果は、Nishigauchi (1990) の観察の方が正しいということを示していることになる。

### 3. プロソディの重要性: Deguchi and Kitagawa (2002)

次に、Deguchi and Kitagawa (2002) = D & K の WH 島の効果の分析について考えよう。D & K は、プロソディのパターンの違いから以下の (13) のような例文の分析を試みている。<sup>5</sup>

- (13) ジョンは [メリーが 何を 買った かどうか] 今でも知りたがっているの？

まず、D & K は標準的な東京方言において不確定代名詞を含む WH 疑問文には特別な強調を伴うプロソディ (Emphatic Prosody = EPD) が認められると指摘する。具体的には不確定代名詞の最初の音節が高ピッチの強調アクセントで発話され、それに続く要素のアクセントが消失しピッチが低くなるというピッチパターンが EPD である。以下の (14) は (13) の例文を二つの EPD で発話したものを示しており、網かけの部分のピッチの低下を示す部分である。(文法性の判断は D&K の示したものである。%) は母語話者の間に文法的と判断する人とそうでない人が混在することを示し

ている。)

- (14) a. % JO'hn-wa [MA'ry-ga NA'ni-o  
katta-kadooka] i'mademo  
siritagatteiru-nO↑  
b. JO'hn-wa [MA'ry-ga NA'ni-o  
katta-kadooka] i'mademo  
siritagatteiru-nO↑

D & K は (14a) を Short EPD、(14b) を Long EPD と呼んでいる。Short EPD では、高ピッチの強調アクセントの後のピッチの低下が埋め込み文内で終わり、その後に「今でも」の部分で再度高ピッチのアクセントが置かれる。Long EPD では、ピッチの低下がそのまま文末まで続く。そして、D & K は、Short EPD が Yes / No 疑問文の解釈を可能にし、Long EPD が WH 疑問文の解釈を可能にする主張している。また、D & K によれば、(14a) は「かどうか」を英語の *whether* と同じように解釈する母語話者にとっては非文法的であるが、「かどうか」をただの WH 疑問文をマークする補文標識 (complementizer) として捉える母語話者は文法的だと判断すると主張している。<sup>6</sup> このポイントは母語話者の間で文法性の判断が分かれるところであるが、ここで重要なことは、(13) の例文を Long EPD のパターンで発話すると、多くの母語話者が WH 疑問文の解釈が可能になる (かもしれない) と感じることである。しかしながら、一方で Long EPD で発話すると本当に文法的になるのかどうかの判断を躊躇する母語話者が多いことも事実である。このような混乱を避けるために、(15) のように「かどうか」の代わりに「か」を使えば、少なくとも英語の *whether* の解釈は排除できるので、Yes / No 疑問文と WH 疑問文の両方の解釈がより簡単に出てくると予測する。

- (15) ジョンは [メリーが 何を 買ったか] 今でも知りたがっているの？

二つの EPD のパターンでの発話は (16) のようになる。

- (16) a. JO'hn-wa [MA'ry-ga NA'ni-o  
katta-ka] I'mademo siritagatteiru-  
no↑
- b. % JO'hn-wa [MA'ry-ga NA'ni-o  
katta-ka] i'mademo siritagatteiru-  
no↑

D & Kの分析では、Short EPDの(16a)がYes/No疑問文に、Long EPDの(16b)がWH疑問文に解釈されるはずであると予測するが、実際のところD & Kの主張と母語話者の判断は完全には一致せず、(16b)がWH疑問文として解釈しやすくなるという点では一致するのであるが、%で示したように、(16b)を完全に文法的であると判断しない母語話者が少なくないのが現状である。この結果は前節の結論と一致している。「のかい」と「んだい」のテストを使ってみると、以下のような結果になる。

- (17) a. JO'hn-wa [MA'ry-ga NA'ni-o  
katta-ka] I'mademo siritagatteiru-  
nokai↑
- b. \* JO'hn-wa [MA'ry-ga NA'ni-o  
katta-ka] i'mademo siritagatteiru-  
nokai↑
- (18) a. \* JO'hn-wa [MA'ry-ga NA'ni-o  
katta-ka] I'mademo siritagatteiru-  
ndai↑
- b. % JO'hn-wa [MA'ry-ga NA'ni-o  
katta-ka] i'mademo siritagatteiru-  
ndai↑

(17)の文法性のコントラストはD & Kの分析が予測するものである。「のかい」はYes/No疑問文のShort EPD(17a)と最も相性が高いと予測するからである。(17b)はWH疑問文に対応するLong EPDが「のかい」と合わないので不自然な文であると判断される。また、(18a)と(18b)は重要なポイントを示唆している。(18a)の非文

法性は、WH疑問文の解釈を要求する「んだい」があるにもかかわらず、Short EPDのために文全体をWH疑問文として解釈できないことを示している。さらに、(18b)はWH疑問文の解釈を促すLong EPDを使ってさえも、「んだい」で自然な(文法的な)WH疑問文を導き出すことができないと判断する母語話者が存在するということである。

ここで、埋め込み文の補文標識を「と」に変え「のかい」と「んだい」のテストをすると以下のようなことになるのである。

- (19) a. \* JO'hn-wa [MA'ry-ga NA'ni-o  
katta-to] I'mademo omotteiru-  
nokai↑
- b. \* JO'hn-wa [MA'ry-ga NA'ni-o  
katta-to] i'mademo omotteiru-  
nokai↑
- (20) a. ?? JO'hn-wa [MA'ry-ga NA'ni-o  
katta-to] I'mademo omotteiru-  
ndai↑
- b. JO'hn-wa [MA'ry-ga NA'ni-o  
katta-to] i'mademo omotteiru-  
ndai↑

(19)の例文は両方とも「と」も「のかい」も「何」と結びつくことができないので非文法的である。(20a)はShort EPDが文全体をWH疑問文にすることと合致しないので不自然な文になる。<sup>7</sup> (20b)はLong EPDと「んだい」が文全体をWH疑問文にすることと合致するので最も自然な文になる。

以上のディスカッションをまとめると、D & Kの分析は、それまで漠然とイントネーションによって文法性の判断が左右されると言われてきたことに対して、Short EPDとLong EPDの二種類のプロソディのパターンを明確に特定した点において重要な貢献をしたと言える。しかし、「のかい」と「んだい」のテストと一部相反する部分があるということも事実である。したがって、D & Kの分析を考慮しても、日本語にLFにおいてWH島の効果が存在するというNishigauchi(1990)の観察が適切であることには変わりがない。それでは、

の素性をもつUBerが必要である。これを図示すると以下になる。(線で結ばれている要素間にUBingの関係が成立していることを示している。)

(23) a. \* [[何を と ] ]

b. 
$$\begin{array}{ccccc} -Q & & & & \\ & [ & [ \text{何}_j & \text{を} & \text{と} ] & \text{の}_j ] \\ & & \text{WH} & & -Q \\ +Q & & & & \end{array}$$

(24) a. ジョンは [メリーが 何<sub>j</sub> を 買ったか<sub>i</sub>] 知っている。

b. ジョンは [メリーが 何<sub>j</sub> を 買ったか<sub>i</sub>] 知っているのかい？

埋め込み文の「か」は [+Q] の素性をもつので、(24a) から、「か」が「なに」の UBer になることができる。さらに、(24b) と (24c) の文法性の違いから、埋め込み文の UBer が「なに」を UBing することが義務的であり、主節の [+Q] の要素からの UBing のパターンは存在しないことがわかる。これを図示すると以下のようになる。

不確定代名詞は適切な非選択的束縛をしてくれる要素 (unselective binder = UBer) によってUBingされなければ解釈不能になる。以下の文法性のコントラストは (22a) ではUBingが成立していないが, (22b) では成立していることを示している。(下付きの "j" などのインデックスは束縛 (binding) 関係を示す。)

(25) a.  $\left[ \left[ \text{何}_j \text{を} \right]_{\text{WH}} \text{か}_j \right]$   
 +Q  
 b.  $\left[ \left[ \text{何}_j \text{を} \right]_{\text{WH}} \text{か}_j \right] \text{のかい}_k$   
 +Q +Q (Y/N)  
 c. \*  $\left[ \left[ \text{何}_j \text{を} \right]_{\text{WH}} \text{か}_j \right] \text{んだい}_k$   
 +Q +Q (WH)

62 | Educational Studies 58  
International Christian University



(26)\*    [[何<sub>k</sub>を      か<sub>j</sub>]      んだい<sub>k</sub>]  
                WH                                 +Q  
+O(WH)

$$(27) \begin{bmatrix} \begin{bmatrix} X \\ Y \\ Z \end{bmatrix} \\ \alpha \end{bmatrix}$$
$$(28) \left[ \left[ \left[ X \right] Y \right] Z \right]$$

(29) a. ジョンは「誰<sub>j</sub>が参加しても<sub>j</sub>」気にしない。  
 b. ジョンは「誰<sub>j/k</sub>が参加しても<sub>j</sub>」気にしないの<sub>k</sub>？

(30) a. ジョンは「誰<sub>j</sub>が参加しても<sub>j</sub>」気にしないのかい<sub>k</sub>？  
 b. ジョンは「誰<sub>k</sub>が参加しても<sub>j</sub>」気にしないんだい<sub>k</sub>？

このように、同じ素性をもつ要素間にはミニマ

リティ効果がみられるが、異なる素性をもつ要素間にはみられないことがわかった。次節では、3節で提起した問題に戻り、ミニマリティ効果とプロソディの関係を考えることにする。

## 5. アクセントの消失と Unselective Binding

3節で提起した問題は、そもそもなぜプロソディを調整すると文末の補文標識の位置からの UBing が可能になっている (かの) ように聞こえるのかということである。もう一度以下の例文を (32) = (15) 考えよう。

(32) ジョンは [メリーが 何を 買ったか] 今でも  
知りがっているの？

これを D & K の二種類の EPD で発話すると  
(33) = (16) になる。

- (33) a. JO'hn-wa [MA'ry-ga NA'ni-o  
katta-ka] I'mademo siritagatteiru-  
nO↑  
b. % JO'hn-wa [MA'ry-ga NA'ni-o  
katta-ka] i'mademo siritagatteiru-  
nO↑

前節で説明したように、埋め込み文の「か」も主節の「の」も両方とも [+Q] の素性をもつ要素なので、ミニマリティ効果の観点からは、Yes/No 疑問文の解釈しか存在しないはずである。これが正しいことはすでに2節で「のかい」と「んだい」を使って示した通りである。Short EPD で発話した (33a) の場合は、埋め込み文の補文標識である「か」が UBer になり Yes / No 疑問文の解釈のみが可能である。このポイントに関しては母語話者の間で一致した判断がえられる。これは、Short EPD では埋め込み文の「か」もアクセントを消失するが、次の「今でも」が高ピッチで発話されることによって「か」の存在が明らかになるので、「か」がミニマリティの条件を満たす UBer であることがしっかりと認知できるからである

う。しかし、Long EPD で発話した (32b) の場合は、本来ミニマリティの条件を満たさない解釈であるから非文法的なのであるが、多くの母語話者が WH 疑問文の解釈が比較的しやすくなる (かもしれない) と感じる。これはなぜだろうか？ 一つの可能性は、Long EPD がミニマリティ効果を誘発するかどうかに関して何らかの影響を及ぼすのかもしれないということである。Long EPD では不確定代名詞の後の要素がすべてアクセントを消失し、最後の [+Q] の「の」だけが際立って発話されるようになるので、この文末の UBer が不確定代名詞と結びつきやすくなるのではないだろうか。つまり、埋め込み文内の UBer であるべき「か」が Long EPD のために目立たなく (聞こえにくく) なり、本来は不確定代名詞の UBer として機能すべきだが、その認識が薄れてミニマリティ効果を誘発する要素として認知されなくなってしまったと考えるのである。埋め込み文内に [+Q] の素性をもつ UBer が存在しないと認識された場合、不確定代名詞には他の UBer が必要となり、際立って発話される文末の [+Q] をもつ「の」と結びついて WH 疑問文の解釈が生まれると考えるのである。このように考えれば、(33b) のようなデータに対する母語話者の反応をうまく捉えることができるのではないだろうか。

## 6. まとめ

本稿では不確定代名詞の意味解釈について考察した。WH 島の効果をめぐる論争に対してプロソディの要素が重要な役割を果たしているという D&K の分析を部分的に支持する一方で、「のかい」と「んだい」のテストを使って不確定代名詞と適切な UBer との関係の重要性を指摘した。どんなにプロソディを変えて聞こえを良くしようと努力しても、統語的な UBing にかかるミニマリティの条件を満たさないかぎり文法的な WH 疑問文を作ることができないというポイントが明らかになったのではないだろうか。

## 注



- 1 本稿では, Kuroda (1965) の indeterminate pronoun の翻訳として不確定代名詞を使うことにする。また, ここでは「結びつく」という表現にしたが、後に詳しく述べるように, 正確には不確定代名詞の意味解釈はそれを非選択的に束縛 (unselectively bind) する要素によって決定される。(Pesetsky 1987, Nishigauchi 1990 などを参照のこと。)
- 2 通常「か」を疑問の助詞と捉え, 「の」は「のですか」の省略形であると考えるが, 本稿では「の」が疑問文を作る要素であると仮定する。また, 助詞を使わずに文末を上げたイントネーションにすることによって疑問文を作ることにも可能であるが, 本稿では取り扱わない。
- 3 "Who asked whether Mary bought what?" のように主節が WH 疑問文である時は共起することが可能であるが, このタイプのデータは本論と直接的な関係がないので扱わない。
- 4 この観察は Miyagawa (1998) によってなされたものである。「俺様がチャンピオンだい!」のように「(ん) だい」は疑問を示さない文脈では WH 疑問文以外にも使われる。
- 5 上述の英語の *whether* と WH の両方を同一節内に含むデータと同じように, このような日本語の例文を嫌う母語話者が多く, これまでは非文法的であるとされてきたものである。
- 6 さらに D & K は「かどうか」と「か」の混同は今現在進行中の言語変化の一部であろうと述べている。
- 7 しかし完全に非文法的であると判断できないのは, 文末の「んだい」が WH 疑問文を要求しており「と」は不確定代名詞とは結びつかないので, 何とか WH 疑問文としての解釈が可能になると判断するからであろう。
- 8 詳しくは Chomsky 1995, Rizzi 1990 などを参照のこと
- 9 この場合「構造上最も近い」というのは, X を Y の方が Z よりも先に c-統御 (c-command) していることを示す。

## 参考文献

- Chomsky, N. (1995). *The minimalist program*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Deguchi, M., & Kitagawa, Y. (2002). Prosody and wh-questions. In Hirofumi, M. (Ed.). *Proceedings of the North Eastern Linguistic Society* 32 (pp. 73–92). Amherst, MA: Graduate Linguistics Student Association.
- Ishihara, S. (2002). Invisible but audible wh-scope marking: Wh-construction and deaccenting in

- Japanese. In *Proceedings of the West Coast Conference on Formal Linguistics* 21 (pp. 180–193). Cascadia Press.
- Kitagawa, Y. (2006). Naze. In Suzuki, Y., Mizuno, K., & Takami, K. (Eds.). *In search of the essence of language science: Festschrift for Professor Heizo Nakajima on the occasion of his sixtieth birthday* (pp. 101–120). Tokyo: Hituzi shobo.
- Kuroda, S.-Y. (1965). *Generative grammatical studies in the Japanese language*. Doctoral dissertation, MIT.
- Lasnik, H., & Saito, M. (1984). On the nature of proper-government. *Linguistic Inquiry* 15, 235–289.
- Miyagawa, S. (1998). On islands. Ms., MIT.
- Nishigauchi, T. (1990). *Quantification in the theory of grammar*. Dordrecht: Reidel.
- Pesetsky, D. (1987). *Wh-in-situ: Movement and unselective binding*. In Reuland, E., & ter Meulen, A. G. (Eds.). *The representation of (in)definiteness* (pp. 98–129). Cambridge, MA: MIT Press.
- Rizzi, L. (1990). *Relativized Minimality*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Takahashi, D. (1993). Movement of wh-phrases in Japanese. *Natural Language and Linguistic Theory* 11, 655–678.
- Yoshida, T. (1999). LF subadjacency effects revisited. In Lin, V., Krause, C., Bruening, B., & Arregi, K. (Eds.) *MIT working papers in linguistics* 34 (pp. 1–34). Cambridge, MA: Department of Linguistics and philosophy.

